

第2章 自然からの恵み

ひやくそう
百草をなめて薬を探求した神農の伝説が物語るように、人は古くから自然の恵みに目を向け、薬となる動植物や鉱物を暮らしに活かしてきました。古代中国の本草書『神農本草経』では、生薬を上品、ちゅうほん けほん
中品、下品に分けています。上品は無毒で長期間服用でき、中品は使い方次第で毒にもなるので注意が必要、下品は病気を治すのに役立つが毒性が強く長期服用は避けたほうがよいとされました。長い歴史を経て、今に伝わる生薬の例を紹介します。

1 植物の生薬

当館所蔵の旧千葉県薬草園生薬標本コレクション約570点のうち、ほぼ4分の3が植物由来の生薬です。『神農本草経』の上品の代表といえる朝鮮人参や、下品にあたるトリカブトの仲間にご存じの方も多いでしょう。塩附子は、トリカブトの根茎を生薬とするために、ニガリや塩で加工して毒性を弱めたものです。



塩附子（えんぶし）

鎮痛・強心・抗炎症作用などの薬効で知られ、体を温める作用も強い。

2 菌類の生薬

菌類由来の生薬は、きのこの仲間（担子菌類）の子実体や菌核の乾燥品が多いですが、ちゆうそう
虫草と呼ばれる、昆虫等から発生するカビの仲間（子囊菌類）も生薬となります。



霊芝（れいし）

広葉樹の根際に見えるマンネンタケの子実体を乾燥させたもの。縁起物とされ、吉祥の印としても描かれる。消炎、解熱など。



茯苓（ぶくりょう）

土中のマツ類の根に形成される菌核で、大きいものは人頭大。かつては茯苓突きと呼ばれる棒で探し当てた。利尿作用など。

3 動物の生薬

動物由来の生薬は、入手や加工が困難であるためか、あまり多くはありません。熊胆（熊の胆嚢）や牛黄など哺乳類由来の生薬や、昆虫など節足動物由来の生薬が中心です。他にも、トッケイヤモリの干物やムササビの糞などユニークなものが含まれます。



牛黄（ごおう）

ウシの胆嚢中にできた結石。約1,000頭のうち1頭にしか見つからない。鎮静・鎮痙作用、強心作用など。



白僵蚕（びやつきょうさん）

カイコの幼虫がビヤッキョウ菌に感染して死に、硬直したものを。鎮痙・去痰（きょたん）作用など。

4 鉱物の生薬

鉱物系の生薬には、化学物質の純粋な結晶からなる本来の鉱物のほか、細かい鉱物の集合体である岩石や粘土もあります。また、化石も生薬として使われます。



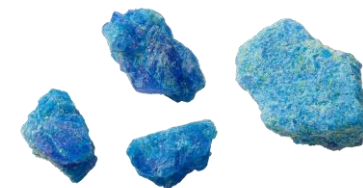
雄黄（ゆうおう）

砒素（ひそ）と硫黄の化合物。解毒剤などとして使用されていたが、有毒であるため、現在は使用されていない。



朱砂（しゅしゃ）

水銀と硫黄の化合物で、正式な鉱物名は「辰砂（しんしゃ）」。鎮静薬などとして用いられる。また、赤色の顔料としても使われる。



緑礬（りょくばん）

水を含む鉄の硫酸塩。止血用の軟膏などに使用された。現在では、染料や顔料として使われる。

第3章 温故知新

中国で生まれた、薬となる天然物に関する学問を本草学と呼び、その集大成が中国・明代の本草書、李時珍の『本草綱目』(1596年)です。それ以前の本草書では『神農本草経』以来、生薬を毒性の強弱に応じて上品・中品・下品に分類していましたが、『本草綱目』では1,897種類の天然物を、今の分類学に通じる発想の「綱」と「目」で分類しました。

1 中国からの学び

江戸時代の本草学者は『本草綱目』を学びました。貝原益軒(1630-1714)は『本草綱目』を徹底的に研究し、中国と日本で異なる動植物が存在することに注目して日本固有の358種類を含む1,362種類の天然物を『大和本草』にまとめました。



貝原益軒『大和本草』
「諸品図」(1715年)より「玫瑰花」
千葉県立中央博物館所蔵 ※一部加工

2 日本独自の学び

医薬が普及するにつれ薬用植物の需要が高まり、8代将軍徳川吉宗(1684-1751)は当時「採薬」と呼ばれた国内の有用な動植物の探索と、外国産種の栽培・増産を奨励しました。



木村兼葭堂著・蔀関月画『日本山海名産図会』(1799年)
卷之二より「陸弩捕熊」 千葉県立中央博物館所蔵 ※一部加工

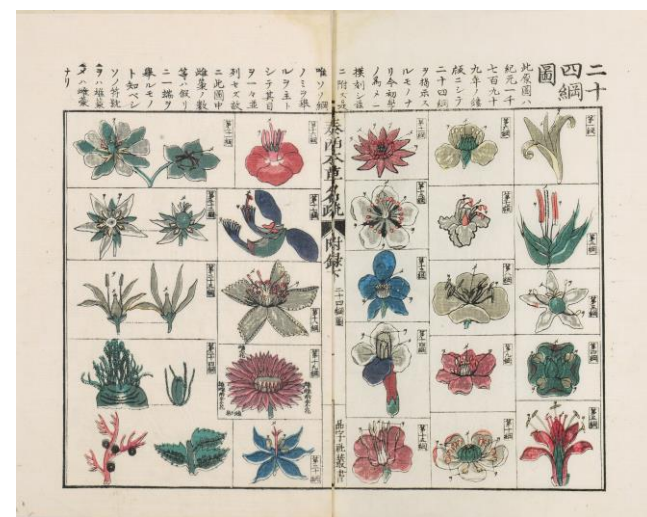
千葉県船橋市に残る「薬園台」という地名は、この時代に作られた「滝台野薬園」の名残です。各地の産物の採取や生産のようすを図解した『日本山海名産図会』の熊の項には、熊の捕り方から偽物の熊胆の作り方まで、詳細に記されています。

多くの門弟に本草学を教えた小野蘭山(1729-1810)は晩年、幕府の命により諸国で採薬を行いました。『房総常州採薬記』(1803年)は千葉県・茨城県の動植物の貴重な記録です。

3 西洋からの学び

江戸時代の本草学者は、オランダの書物や来日した医師のツェンベリ、シーボルトらから西洋の薬学、植物学も学びました。宇田川榕菴(1796-1846)は、『和蘭薬鏡』(1820年)等の著書で西洋の知識を広めました。江戸では「赭鞭会」、名古屋では「嘗百社」と、いずれも神農の故事に因んだ名をもつ研究会が結成され、博物学的な本草研究が盛んに行われました。

伊藤圭介(1803-1901)はシーボルトから贈られたツェンベリーの『日本植物誌』(1784年)をもとに『泰西本草名疏』を記して植物の和名、漢名、学名を対照させ、リンネの分類法を紹介しました。



伊藤圭介『泰西本草名疏』(1829年)
リンネの植物分類を示す「二十四綱目」
千葉県立中央博物館所蔵 ※一部加工

第4章 みょうやく 妙薬おゆずりくだされ

今から数百年前の房総では、様々な薬が作られ、売られ、使われていました。病気やけがに見舞われ薬を求めた人々は、まさに「妙薬おゆずりくだされ」と願ったことでしょう。

生薬を使って作られる薬が人々の手元に届くまでを追いかけ、江戸時代以降の生薬事情を探ります。

1 薬を作る

薬作りには、多様な道具が使われました。

薬研は、生薬を押しつぶして細かくする道具です。右の薬研は「十三枚本世散」という膏薬で有名な、高安本世堂病院（現在の香取市扇島）で使われていました。



薬研
千葉県立中央博物館大利根分館所蔵

ぶくりょうとせい 茯苓渡世の百姓

下総国印旛郡萩原村（現在の印西市萩原）には「茯苓渡世」と記録された百姓が確認できます*。「渡世」とは生業を意味する言葉です。

茯苓は地中にあるため、採取には先端が鋭利な専用の道具「茯苓突き」が用いられました。

*印旛村史編さん委員会編『印旛村史』近世編史料集2（印旛村、1978年）601～602頁



茯苓突き
千葉県立中央博物館大利根分館所蔵
※使用地不明。萩原村で使用されたとは限らない

2 薬を売る

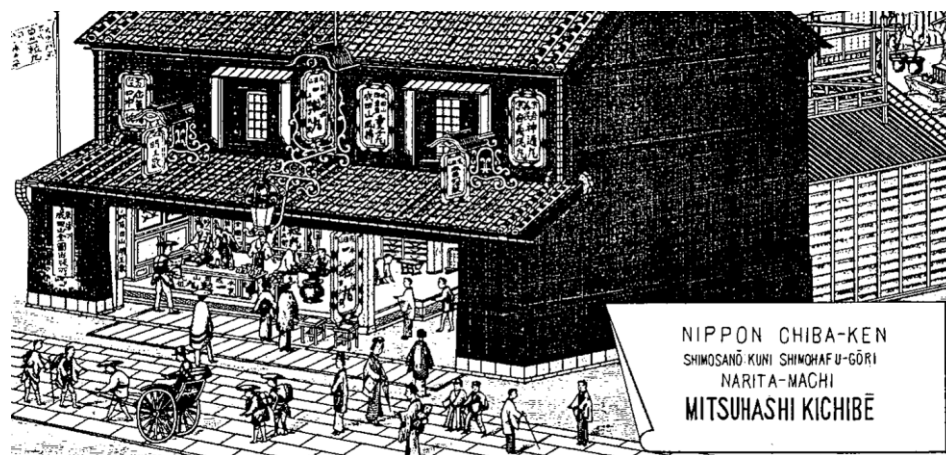
売薬といえば越中国（現在の富山県）の置き薬が有名ですが、房総でも多くの薬が売買されてきました。成田山新勝寺の門前の一粒丸や、東金の一角丸が有名です。

下の銅版画は、明治時代の三橋吉兵衛家（現在の成田市仲町）の店先です。目をこらすと、1階の軒下と2階の中央に「一粒丸」の看板が見えます。

3 薬を求める

「指の妙薬」という薬を製造した三上家（現在のいすみ市下布施）には、100日以上も治らない息子の関節痛に効果があるならば、価格を問わず「妙薬御譲り下さ」れと訴える往復はがき（往信部分）が残っています*。「妙薬」を求めて積極的に行動する患者側の様子がうかがえます。復信部分は切り取られ、三上家が返信したことがわかります。

*三上家文書（千葉県文書館所蔵）



『日本博覧図』より三橋吉兵衛家（一部拡大）
千葉県立中央博物館所蔵 ※一部加工

千葉県の薬草園

生薬の元となる薬用植物を見学できる主な薬草園をご紹介します。生きているときは、どんな香りでどんな花を咲かせているのか、実際に植栽展示されている場所へ、ぜひ見に行ってください。

日本大学薬学部薬用植物園

面積約12,000㎡、国内外の薬用植物約1,000種を植栽
所在地：千葉県船橋市習志野台7-7-1
公開日：不定期
<https://mpgarden.pha.nihon-u.ac.jp>

東邦大学薬用植物園

面積約5,500㎡、約800種の薬用植物を植栽
所在地：千葉県船橋市三山2-2-1
開園時間：平日9:30-16:00（10名以上の団体は事前申込）
<https://www.lab.toho-u.ac.jp/phar/yakusou/>

（株）常磐植物化学研究所 佐倉ハーブ園

面積約10,000㎡、1,000種類を超えるハーブ、薬用植物を植栽
所在地：千葉県佐倉市木野子158
開園時間：10:00-16:00（不定休）
<https://sakura-herben.tokiwaph.co.jp>

mitosaya 薬草園蒸留所

千葉県薬草園の跡地に平成29年に開園した蒸留所
面積約16,000㎡、500種類を超える薬用植物を植栽
所在地：千葉県夷隅郡大多喜町大多喜486
公開日：毎週末（金・土）ガイド付きのツアーあり
<https://mitosaya.com>

本解説書では、生薬や漢方薬への理解を深めるため、参考として、薬効等も表示しております。実際に薬を使用される場合には、必ず医師や薬剤師等の医療従事者の指導を受けてください。

令和7年度企画展 生薬～自然からの恵み～ 展示解説書

発行 千葉県立中央博物館（千葉市中央区青葉町955-2）
令和8年3月13日

本解説書の作成は、以下の千葉県立中央博物館研究員が担当しました。
御巫由紀、山本伸子、丸山啓志、栃原行人、須田華那

〔表紙写真解説〕左上から下に

羚羊角、乳香、釣藤鈎、
海馬、石斛、朝鮮人参、
鼈甲、綠礬、熊胆、蛤蚧、
干振（当薬）、枳実、朱砂、
牛黄、靈芝、白殭蚕、
白花蛇